

自分の聖書を開いて

通読箇所——哀歌 1-2 章
静まって、心を主に向け、ゆっくり2、3回読む

- ひとことの覚え書き 疑問に思ったことは？

ディボーションメモ 祈祷課題や応えられた祈りなど自由に書きましょう。

3. みことばを味わおう



哀歌 2:1-10 罪に対する神の怒り

「哀歌」は、ユダ王国がバビロンの攻撃によって崩壊し、エルサレムは破壊され、多くの人々がバビロンに捕囚として連れ去られた直後に記された悲しみの歌で、「エレミヤの哀歌」とも呼ばれています。

バビロン軍は、エルサレムの人々を虐殺し、拷問を加え、家を荒らし、さらに、「すべての宮殿を滅ぼし」(5節)しました。「主の宮と王宮とエルサレムのすべての家を焼き、そのおもだった建物をことごとく火で焼いた」(Ⅱ列王 25:9)のです。

主の宮(神殿)の破壊は民にとって「例祭の場所」と「例祭と安息日」「王と祭司」「祭壇」「聖所」(6-7節)を失うことでした。もはや目に見える形での習慣的な礼拝行為ができなくなったのです。

平凡な日常生活のためには、安全を保障する「城門」、民を指導する「王と首長」、個人と社会を律する「律法」、神のみこころを告げる「預言者」が必要です。そのすべてが打ち砕かれてしまいました(9節)。

バビロンによるエルサレムの崩壊は、エレミヤにとっては「神の怒りと憤り」の表れでした。バビロンは神の道具として用いられたのです。神の「怒り」が3回(1、1、3節)、神の「憤り」が3回(2、4、6節)出てきます。「不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです」(ローマ 1:18)

平穏な生活が失われ、強大な敵におびえ、形としての宗教行事ができなくなったとき、神の御前で「地にすわって黙りこみ、頭にはちりをまき散らし、身には荒布をまと」(10節)う、という真の「悔い改め」が生じました。

祈り

神様。私たちの国は、敗戦から70年、廃虚から立ち上がり、平和と繁栄を築いてきました。教会も信教の自由を得て、自由に礼拝や伝道をしてきました。平穏な歩みの中で、罪に対するあなたの「聖なる怒りと憤り」を忘れがちになります。イエス様が十字架であなたの聖なる怒りをすべて引き受けられたことを覚え、ひれ伏し悔い改めます。

2日(木)

主は慈しみ深い



1. はじめに聖書を読もう

自分の聖書を開いて

今日の聖書 哀歌 3:22-39

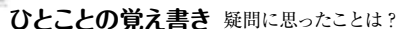
通読箇所——哀歌 3-4 章
静まって、心を主に向け、ゆっくり2、3回読む

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 22 私たちが滅びうせなかったのは、 | 32 たとい悩みを受けても、 |
| 主の恵みによる。 | 主は、その豊かな恵みによって、 |
| 主のあわれみは尽きないからだ。 | あわれんでくださる。 |
| 23 それは朝ごとに新しい。 | 33 主は人の子らを、ただ苦しめ悩 |
| 「あなたの真実が力強い。 | まそうとは、 |
| 24 主こそ、私の受ける分です」と | 思っておられない。 |
| 私のたましいは言う。 | 34 地上のすべての捕らわれ人を足の |
| それゆえ、私は主を待ち望む。 | 下に踏みじり、 |
| 25 主はいつくしみ深い。 | 35 人の権利を、いと高き方の前で |
| 主を待ち望む者、主を求めるたま | 曲げ、 |
| しいに。 | 36 人がそのさばきをゆがめること |
| 26 主の救いを黙って待つのは良い。 | を、 |
| 27 人が、若い時に、くびきを負うの | 主は見えておられないだろうか。 |
| は良い。 | 37 主が命じたのでなければ、 |
| 28 それを負わされたなら、 | だれがこのようなことを語り、 |
| ひとり黙ってすわっているがよい。 | このようなことを起こしえようか。 |
| 29 口をちりにつけよ。 | 38 わざわいも幸いも、 |
| もしや希望があるかもしれない。 | いと高き方の御口から出るの |
| 30 自分を打つ者に頬を与え、 | はないか。 |
| 十分そしりを受けよ。 | 39 生きている人間は、なぜつづやく |
| 31 主は、いつまでも見放してはおら | のか。 |
| れない。 | 自分自身の罪のためにか。 |

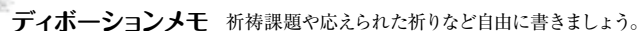


聖書をよく観察し、自分自身に当てはめて考える

書き出してみましょう。導かれた思いを記しましょう。



疑問に思ったことは？



祈祷課題や応えられた祈りなど自由に書きましょう。



みことばを味わおう



哀歌 3:22-39.....主は慈しみ深い

筆者が救い主イエスを信じたのは、18歳の時でした。高校生活の終わり頃、顔に吹き出物ができ、高熱が出て、倒れてしまったのです。病床でラジオを聞いていると「慈しみ深き友なるイエスは」という賛美歌が流れてきました。小学校の頃、教わった唱歌のメロディーと同じでした。弱り切った体と心にしみ込んできました。この経験がなければ、私は今もイエス様の救い、恵みを知らないままで人生を送っていたかもしれません。

伝道者になって、さまざまな方々にイエス様をお伝えしてきましたが、「いいことばかり続いて、ありがたくて、神様を信じ感謝するために来ました」と言って教会の門をたたかれる方はほとんどありません。悲しいこと、つらいこと、自分の惨めさなどを抱えながら、イエス様にお会いして、人生の再出発をなさる方が多いのです。

廃墟となったエルサレムの街、の中でエレミヤは生き残った人々と共に「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ」(22 節)と告白します。肉親や親しい人々を失い、生き残った人々は、どんなにつらく悲しくても滅びうせてはいないのですから、生き続けなければなりません。頼るべき人も、家も財産も失った残された人々にとってただ一つの希望は、神に立ち返ることでした。「『あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です』…それゆえ、私は主を待ち望む」(23-24 節)。エルサレムの崩壊は、民の信仰再生の出発の時でもありました。

国も、組織も、地域も、家族も、教会も、時代の変化や思いがけない出来事や指導者の失敗によって危機に陥り崩壊するかもしれません。しかし、すべてのものを失っても「主こそ、私の受ける分です」という信仰をもった魂が少数であったとしても集まれば、まことの信仰共同体が生まれます。

* 祈り *

神様。試練や困難、貧困や病気、組織の矛盾や家庭の不和などで悩み苦しみの中にある人々のために祈ります。イエス様は「羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている」人々を深くあわれみ、彼らのただ中に入り、癒やし、慰め、励まされました。私たちも主に癒やされ励まされて、痛んでいる人々に祈りつつ関わる者とならせてください。



今日の 聖書 哀歌 5:1-18

1 主よ。私たちに起こったことを思い出してください。
私たちのそしりに目を留めてください。
顧みてください。

2 私たちの相続地は他国人の手に渡り、
私たちの家もよそ者の手に渡りました。

3 私たちは父親のないみなしごととなり、
私たちの母はやもめになりました。

4 私たちは自分たちの水を、金を払って飲み、
自分たちのたきぎも、代価を払って
手に入れなければなりません。

5 私たちはくびきを負って、
追い立てられ、
疲れ果てても、休むことができません。

6 私たちは足りだけの食物を得ようと、
エジプトやアッシリヤに手を伸ばしました。

7 私たちの先祖は罪を犯しました。
彼らはもういません。
彼らの咎を私たちが背負いました。

8 奴隷たちが私たちを支配し、
だれも彼らの手から
私たちを救い出してくれません。

9 私たちは、^{あらの}荒野に^{つるぎ}剣があるために、
いのちがけで自分の食物を得なければなりません。

10 私たちの皮膚は、飢えの苦痛のために、
かまどのように熱くなりました。

11 女たちはシオンで、
おとめたちはユダの町々で、
はずかしめられました。

12 首長たちは彼らの手でつるされ、
長老たちも尊ばれませんでした。

13 若い男たちはひき臼をひかされ、
若い者たちはたきぎを背負ってよろめき、

14 年寄りたちは、城門に集まるのをやめ、
若い男たちは、楽器を鳴らすのをやめました。

15 私たちの心から、喜びは消え、
踊りは喪に変わり、

16 私たちの頭から冠も落ちました。
ああ、私たちにわざわいあれ。
私たちが罪を犯したからです。

17 私たちの心が病んでいるのはこのためです。
私たちの目が暗くなったのもこのためです。

18 シオンの山は荒れ果て、
^{きつね}狐がそこを歩き回っているからです。



ひとことの覚え書き 疑問に思ったことは？



ディボーションメモ 祈祷課題や応えられた祈りなど自由に書きましょう。

3. みことばを味わおう



哀歌 5:1-18 どん底からの祈り

筆者がダルク(薬物依存回復センター)の仲間たちとの交流を始めて12年になります。交わりの中で、これまで気づかなかったこと、教えられることがたくさんありました。回復のためには、自分の無力さを認めること、自分を越えた大きな力に信頼すること、自分の過去と現状を明確に認識することなど、信仰者が神様の前で悔い改めて歩む生き方とよく似ているのです。仲間たちがミーティングで話し合っている「底をつく」経験と、徹底した「棚卸し」は、私の信仰生活に足りない部分でした。

「底をつく」とは、もうどうやってもにっちもさっちもいかない、追い込まれた状況を認めることです。神様の前で罪の認識の甘さ、イエス様による以外に神様の前に立てない自分を自覚することが希薄な自分に気づかされました。

「棚卸し」とは、これまでの人生をいいことも悪いことも、ありのままに書き出し、言い表し、自分自身の姿を認識することです。自分を周りの人々によく見せようとするだけでなく、神様の前でも自分を取り繕う愚かさが見えてきました。

エレミヤは民と共に、底をついた状態、どん底から祈っています。

「主よ。私たちに起こったことを思い出してください。私たちのそしりに目を留めてください。顧みてください」(1節)

アブラハムの子孫・神の選びの民としての誇りも、ダビデ王家の伝統も、神殿礼拝もすべて剥ぎ取られた、どん底の状態をエレミヤは正確に記録しました(2-18節)。落ちて、落ちて、底についた現状認識から、「落ち着いた」ところから新しい出発が始まります。

「主よ。あなたのみもとに帰らせてください。私たちは帰りたいのです。私たちの日を昔のように新しくしてください」(21節)

* 祈り *

神様。今も「哀歌」と同じような状況にある、中近東の圧迫されている人々、北朝鮮の飢えている人々のために祈ります。その人々のために救援活動をしている団体や働き人が支えられますように。私たちの国が再び戦争を起こすことのないように、私たちに現状を認識し行動する落ち着いた心と祈りと行動をお与えください。

Note



1. はじめに聖書を読もう 自分の聖書を開いて

今日の  聖書 マルコ 16:1-8

聖書箇所——マルコ 15:1-16:8
静まって、心を主に向け、ゆっくり2、3回読む

- あんそくにち
- さて、安息日が終わったので、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとは、イエスに油を塗りに行こうと思い、香料を買った。
 - そして、週の初めの日の早朝、日が上ったとき、墓に着いた。
 - 彼女たちは、「墓の入口からあの石をころがしてくれる人が、だれかいるでしょうか」とみなが話し合っていた。
 - ところが、目を上げて見ると、あれほど大きな石だったのに、その石がすでにころがしてあった。
 - それで、墓の中に入ったところ、真っ白な長い衣をまとった青年が右側にすわっているのが見えた。彼女たちは驚いた。
 - 青年は言った。「驚いてはいけません。あなたがたは、十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのでしょうか。あの方はよみがえられました。ここにはおられません。ご覧なさい。ここがあの方の納められた所です。
 - ですから行って、お弟子たちとペテロに、『イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます。前に言われたとおり、そこでお会いできます』とそう言いなさい。」
 - 女たちは、墓を出て、そこから逃げ去った。すっかり震え上がって、気も転倒していたからである。そしてだれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

十どのみことばが心にとまりましたか。書き出してみましょう。導かれた思いを記しましょう。

ひとことの覚え書き 疑問に思ったことは？

ディボーションメモ 祈祷課題や応えられた祈りなど自由に書きましょう。

3. 日曜日への備え～みことばの解説



マルコ 15:1-16:8 主の約束

1. ピラトの前に立つイエス (15:1-15)

マルコの福音書 15 章からはイエスをどうにかして十字架につけようとする裁判が始まる。この裁判はユダヤ人指導者たちによるでっち上げといってよいもので、もしイエスご自身が自ら身の潔白を訴えたなら、十字架への道はなかった。しかしイエスはただ黙って裁判の席に立つ。その姿はイザヤ書 53 章に明記されている苦難のしもべであるメシヤ像である。これまで律法学者らから、数多くの言いがかりともいえる論争を挑まれてきたが、イエスはことごとく論破してきている。しかし、イエスに対する不当な裁判が始まると、沈黙を守る。人類の^{あがな}贖いという使命のためである。

ユダヤ人指導者たちは、イエスが神を^{ぼうとく}冒瀆したからという理由で訴えていたが、ローマの総督ピラトに対しては、イエスが王と名乗り皇帝の権力を脅かす存在であると訴えている。ユダヤ人には十字架刑を命じる権限がなかったので、その権限をもつローマの総督であるピラトを利用しようとしたのである。

祭司長たちに先導された群衆は、わずか1週間前には「ホサナ」と歓迎したイエスを「十字架につけろ」と叫ぶ。この群衆の姿から自らの意思によって真理や公正を図ることができない愚かで罪深い人の姿が見える。ピラトはこの群衆に迎合し、十字架刑を決断する。

2. 十字架 (15:16-39)

クリスチャンのシンボルともいえる十字架は本来ローマ帝国の考えた最も残虐な処刑方法であった。十字架刑が決まったイエスは兵士たちによって総督官邸の中に連れていかれ、むち打ちを受け、茨の冠をかぶせられ、ローマの兵隊からいたぶられる。19 節には兵士らが「ひざまずいて拝んだりしていた」と記されているが、この後イエスが十字架上で語られた「彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」ということばそのものの行為だった。さらに自らがはりつけにされる重い十字架を背負って処刑場までの長い坂道を歩かされた。

ゴルゴタへ向かう途上、クレネ人シモンという男がイエスの代わりに十字架を背負われる。たまたまいた人物の名前がしかも二人の子どもの名前と共に記されていることから、マルコの福音書が書かれた頃には広く名の知られたクリスチャンとなっていたと

思われる。当時、最大の恥辱と考えられていた十字架を負わされる出来事は後にシモンにとって光栄ある体験に変えられたのだろう。

周りのすべての者たちが(両脇の強盗たちすらも)「十字架から降りて来て、自分を救ってみろ」と、ののしる中、イエスご自身は裁判の座と同様に黙して語らず、苦痛を耐え忍び刑を受けられた。イエスは下りて自分を救うことも可能であったろうが、あえてそれをせず、その刑を受け取ることにより神の計画を完成させた。

3. 埋葬と復活 (15:40-16:8)

十二使徒のうち、処刑の場にいたことが記されているのはヨハネのみである。しかし、イエスを愛し忠実に従った女たちは、処刑のようすを遠くから見ていた。彼女らはイエスの死を見届け、埋葬場所を確認した。^{あんそくにち}安息日が明けると彼女たちはすぐにイエスの遺体に香油を塗るために墓を訪れる。墓は入り口の大きな石が取りのけられ、墓の中には真っ白な長い衣をまとった青年(^{みつか}御使い)がおり、イエスの復活を宣言する。「十字架につけられたナザレ人イエス」とのことばは、イエスが明確に処刑によって死んだことと、弟子たちがよく知っているあのイエスであるとの強調であろう。7 節の「お弟子たちとペテロに」とペテロだけが名指しであることは3度イエスを否んだペテロに対する深いあわれみを感じさせる。また「あなたがたより先にガリラヤに行かれます」とのことばは弟子たちと過ごした約3年半の日々のイエスを想起させ、その活動の中心地であったガリラヤでの再会は紛れもなくイエスご自身であることの証明となる。

御使いと出会い、ことばを交わした女たちは何も言えなくなるほど驚き、動揺するが、彼女たちのその驚きこそがイエスの復活を^{あか}証しているといえる。

* 勧め *

主イエスが不当な裁判にかけられ、私たち一人一人のために十字架にかかってくださいました。私たちはその愛にどう応えたらよいのでしょうか。祈り求めましょう。



メッセージ マルコ 15:1-16:8

「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです」(ローマ 4:25)

イエス様の十字架の物語を読むたびにその苦しみに胸が痛みます。

今まで、弱い人、顧みられることのなかった人々の所に身を置き、病を癒やし、救いの福音を語ってきたイエス様。それに応えるかのように自分たちの上着を道に敷き、木の枝を道に敷き、歓呼をもってエルサレムに迎えた人々は、手のひらを返すように、こぞって、イエス様を裏切り、罵ります。

ポンテオ・ピラトはイエス様に何の罪もないことを見て取って、釈放しようとしますが、ユダヤ人たちは執拗にイエス様を十字架につけるように迫ります。そして、罪のないイエス様ではなく重罪人のバラバの釈放を求めます。

最も近くにいて、生活を共にしていた弟子たちも逃げ出し、自分の傍らには誰一人味方がいない孤独です。むちで打たれ、茨の冠をかぶせられるという体の痛みもさることながら、この心の痛みはどんなにつらかったかと思います。さらに非道なローマ兵による苦痛が加えられます。

むち打ちは死ぬぎりぎりといわれる 39 回にも及びました。その傷だらけの体に紫の衣を着せ、やがて剥ぎ取り、茨の冠をかぶせたばかりかその上から棍棒で殴りつけ、そしてその疲れきった体に何十 kg もある十字架を背負わせて、何 km もある坂道を歩かせたのです。

その十字架を担いで歩く道のりでは、罵りと嘲りが続きます。つばきを吐きかけられ、石をぶつけられました。

その人々はイエス様が慈しみ、愛された者たちであるにもかかわらずです。

イエス様は十字架の上で「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」と祈られましたが、わからないでいるということはなんと残酷で罪深いことかと思います。

わかろうとすること、そして理解しようと努力することは本当に大事だと思います。

イエス様は誰よりも私たちのことをわかってくださる方であることはなんとうれしいこ

とでしょう。

イエス様に倣って人を理解できる者にさせられたいものです。

イエス様の十字架は人々を二つに分ける、と言われていました。それは、イエス様をあざ笑う者と悲しむ者、仰ぎ見る者と見下ろす者、信じる者と信じない者です。

十字架の右側の強盗やローマの百人隊長は数少ない、信じた者でした。

また母マリヤや使徒ヨハネも足元に来てイエス様を仰ぎました。

さらにその十字架刑の場に居続けた3人の女たちがいました。本来なら愛するイエス様のむごたらしい姿をととても直視できなかったのかもしれませんが。しかし、その女たちは十字架刑の最後まで見届けていたことが聖書からわかります。愛するイエス様の少しでも近くに居続け、その最期を見届けることが彼女たちにできた精いっぱい行為だったのでしょう。しかし、この姿こそがすべての信仰者の原点です。

イエス様の十字架を仰ぎ見ることこそが人に救いをもたらすのです。彼女たちがそうであったように十字架のイエス様を仰ぎ見、また目をそらすことなくそのお姿を仰ぎ見続ける信仰者でありたいと思うのです。

やがて3日後に彼女たちは復活のイエス様に再会します。最初にイエス様と会うことのできる光栄を頂いたのです。マグダラのマリヤは、復活のイエス様に最初に声をかけていただきました。彼女たちが最後までイエス様の埋葬も確認したこと、見続けたことは大きな栄誉につながりました。

信仰の創始者であり完成者である主から目を離さないこと、これが祝福の源なのです。私たちもどんな時にも主から目を離さずにいましょう。

祈り

神様、十字架にかかったイエス様から目をそらさない者とさせてください。いつも私を愛し見守ってくださる愛を私が忘れることがありませんように。